

解題

中地 義和

パリ第四大学のアントワヌ・コンパニオン教授は、日本学術振興会の外国人招聘研究者として、1997年5月26日から6月11日まで日本に滞在された。同教授にとって今回が初めての来日である。その間、題目を異にする五回の講演が催されたが、ここに掲載されるのは、離日も迫った6月9日、本学の法文一号館 113 番教室で行われた第五回目の講演のテキスト全文である。

1950年生まれで、エコール・ポリテクニック出身という異色の経歴をもつコンパニオン氏は、何よりもまず、新しい世代を代表するブルースト学者として知られるが、氏が対象とされる作家、時代、主題は多岐にわたる。また、1985年から94年までニューヨークのコロンビア大学で教鞭を取られたこともあって、フランスやフランス文化を外部から捉える視点を持ち合わせておられる。このたびの滞在中にも、“Pourquoi le français devient une langue comme les autres?”と題して、アメリカにおけるフランス語学習やフランス研究の歴史と現状、および将来の可能性について、偏狭なナショナリズムを超越した冷徹犀利な分析を披露され、聴衆に並々ならぬ感銘を与えた(5月28日、東京日仏学院)。

間テキスト性の問題を論じた文学理論書 (*La Seconde Main ou le travail de la citation*, 1979) 以来、目下のところ七冊を数えるコンパニオン氏の著書の内訳は、モンテーニュに関するものが二冊 (*Nous, Michel de Montaigne*, 1980 ; *Chat en poche. Montaigne et l'allégorie*, 1993)、文学史・芸術史をめぐるものが三冊 (*La Troisième République des lettres*, 1983 ; *Les Cinq Paradoxes de la modernité*, 1990; *Connaissez-vous Brunetière? Enquête sur un antidreyfusard et ses amis*, 1997)、それに国家博士号請求論文に基づく *Proust entre deux siècles*, 1989 である。また、プレイヤード叢書『失われた時を求めて』の第三巻「ソドムとゴモラ」の校訂・注釈の仕事も、特筆すべきであろう。

今回の滞在プログラムでも、五回の講演中の三回がブルーストにあてられた。なかでも、近著の主題を別の角度から展開した日仏会館での講演(5月30日) "L'antisémitisme qui n'ose pas dire son nom : les libéraux dans l'affaire Dreyfus" は、ブルーストの作品中の何気ない一句を手がかりに、第三共和

政下のフランスにおける根強い反ユダヤ感情を照射する野心的試みで、小さな糸のほつれを引っ張ると幕が破れて背後に壮大な一世界が現出する手品さながらの、スリルに満ちたパフォーマンスであった。

コンパニオン氏は、94年にソルボンヌに着任されて以来、同僚のギュイヨー教授とボードレール・セミナーを主宰され、95年に創刊された『ボードレール年鑑』の編集委員も務めておられる。これまでに発表された数本のボードレール論は、いずれも新鮮な刺激に満ち、なかでもボードレールの「モデルニテ」の観念がはらむ矛盾を分析した論文 "Baudelaire devant l'éternel" (*Dix Etudes sur Baudelaire*, Champion, 1993) は、この詩人の理解に新しい展望を開くものである。筆者の大学院の授業が、今年、散文詩を中心とするボードレールの都市のポエジーを対象としていることもあって、五回中の一回をボードレールをめぐる講演に割いていただければ学生諸君にも資するところ大であろうと考えた。また、95年10月にギュイヨー教授が同じく学術振興会の招きで来日された際、「ボードレールと十九世紀の精神」と題して本学で行われた講演と対をなすようにという気持ちもあった。コンパニオン氏はこうした希望を快く承諾された。本講演には、仏文科の教官・学生諸君をはじめ学内外から約70名の聴講者が来場された。ボードレール研究の碩学阿部良雄教養学部名誉教授と本学の蓮實重彦総長も出席され、お二人から講演者に対し、親愛に満ちた感想が寄せられた。

余計な解説を加えるまでもなく、本講演においても、コンパニオン教授の鮮やかな手際的一端は窺えると思う。ここで試みられているのは、『悪の華』の「パリ情景」に収められた詩を主な対象として、「阿片吸飲者」や『内面の日記』他を参照しながら、パリという都会とそこに棲息する女たち（娼婦たち）のように、あるいはただ一人の大いなる娼婦のように捉える想像力の運動を、具体的表現に即して論証することである。その際、詩人は彼が愛読したジョゼフ・ド・メーストルの著作中に現れる "rue passante" という表現にこの詩学の母型ないしエッセンスを見出したのではないかと、という仮説をコンパニオン氏は立てられる。この表現は代換法(hypallage)と呼ばれる破格語法の一例で、通常は「人通りの多い街路」を意味するが、ボードレールの詩学に即せば、"passante"はもはや形容詞ではなく名詞と化し、「街路」＝「通りがかりの女」の同一性を示すにいたっているというのである。コンパニオン氏の議論の文脈では、この仮説の真偽はいわば第二義的な意味しか持たず、それよりも、こうした二重写しの書法がボードレールのテキストの紛れもない現実であってみれば、"rue passante"という表現がそのことを確認す

る指標として暗示と魅力に富んでいることが重要である。講演冒頭でメーストルに触れたときそれを脇にやり、聴衆が忘れかけた末尾にいたって、中間部の論証を二語に凝縮する表現を提示する際に、その表現に言語の精髓を見た哲学者として再びメーストルを呼び出す巧妙な配置に、多くの聴衆は眩惑にも似た印象を受けたのではないだろうか。

本講演の翌日、コンパニオン教授は蓮實総長を表敬訪問され、和やかな懇談のあと、仏文科の教官一同とともに山上会館内での総長主催の昼食会に招待された。19世紀を専門とするフランス文学者でもあられる総長は、かねがね氏の著作に関心を寄せられていたそうで、幸福な偶然の重なりでコンパニオン氏も大いに感激された。

今回の招聘にあたっては、企画の段階から滞在中のお世話にいたるまで、日本を代表する二人のブルースト学者、東京都立大学の吉川一義教授と京都大学の吉田城教授から格別のご協力を賜った。この場を借りて両教授に改めてお礼を申し上げたい。

コンパニオン氏はじつに好奇心旺盛で、自由時間には美術館よりは「現実」を見ることを好まれ、午前中はしばしば一人で都内を散策された。一度など、ガイドブックを頼りに筆者も行ったことのない佃島界限まで遠出され、佃煮を手土産に徒歩で本郷まで戻られたりもした。これほど模範的な招聘者も珍しいが、それでも、筆者が受入れ責任者としてさしたる苦勞を味わわずに済み、氏の滞在がたいそう快適に経過したのは、同僚の先生方のお力添えはもちろんのこと、研究室のスタッフ、そして時に案内役を買ってくれた大学院生諸君のおかげである。その皆さんに心から感謝したい。

二週間余りの滞在中に、コンパニオン教授は日本のブルースト研究家をはじめ、多数のフランス文学研究者・学生に遭遇された。将来留学される学生の幾人かは、きっとソルボンヌで教授の指導を仰ぐことになるだろう。このたびのコンパニオン教授の日本滞在が、今後の研究・教育両面での活発な交流の基盤となることを期待したい。